

「JALのように挑戦する組織と個の集団が
ひとつでも多く生まれれば
日本は大きく変わると本気で考えています」



**WIRED×並木裕太による
初の書籍が2014年春に刊行予定!**

WIREDが、世界を変えるアイデアやイノベーションをより深く伝えるために立ち上げる書籍シリーズ「WIRED BOOKS」。記念すべきそのVOL.1は、並木裕太とのコラボレーションによる『The Startup Academy - 平成国富論』(仮題)。日本経済再生へのカギとなるベンチャーについて、並木独自の視点で多角的に提言する。

COMING
SOON

WIRED BOOKS VOL.1
『The Startup Academy
- 平成国富論』(仮題)
(ディスカヴァー・トゥエンティワン)

並木裕太が 挑戦し続ける理由

夢を描くリアリストがみつめる日本の未来

20数人の小さなコンサル集団を率いて、日本の大企業の内側からイノベーションを起こし続ける男、並木裕太。「さざ波からうねりを起こす」ために日々挑戦を続ける風雲児が見据える日本の未来図とは？

並木裕太は日本航空(JAL)へのプレゼンに際し、経営陣の前に「一方的な提案はしません。そんな提案をしても人も会社も変わりません」という言葉で自分たちのスタンスを示した。

少し距離を置いた地点からクライアント企業の現状を分析し、客観的なファクトに基づいて戦略を練る。これが従来型のコンサルだとしたら、並木のスタイルは異質であり異端だ。ある種の客観性はもちながらも、企業、特に経営者の志に寄り添い、一歩踏み込んだかたちでプロジェクトに加わる。JALのマーケティング改革を例にとるなら、並木が率いるフィールドマネジメントのメンバーは実行部隊である現場深くに入り込み、時に侃々諤々の議論を通じて意識を共有し、目指すべきゴールへとともに歩む。コンサルが顧客企業をクライアントと呼ぶところを、並木が常に「パートナー」と呼ぶという事実は、象徴的にその関係性を示すものだろう。

なぜそこまで手間のかかるスタイルにこだわるのか。その問

いに並木は「実行されないプランには何の意味もない。ファクトを読む洞察力とプランを練る企画力は大切だけれど、最も重要なのはそれを実現させる実行力であり遂行力。それがなければ何も変わらない」と答える。

そして並木はこう付け加える。「突き詰めるとイノベーションって個の情熱や力が起こす。組織が変わるだけでなく、そこで働く個人の意識を変えることが大事で、JALのように挑戦する組織と個の集団がひとつでも多く生まれれば、日本は大きく変わると本気で考えています」

ベルギーに生まれ、アメリカで少年時代を過ごした並木は、自らのアイデンティティである日本を人一倍強く意識する人間なのかもしれない。

「志をもった経営者がたくさんいて、高い業務遂行力をもつ優秀なスタッフがごまんといる日本。ぼくはその力は世界でもトップだと思っている。だから『こんなもんじゃないだろ』という気持ちから、時々刺激的な言葉

を吐いちゃうんですね」

近著『日本プロ野球改造論』で、並木はMLBの世界市場戦略に押され気味の日本プロ野球界を日本企業の縮図だとして「強いリーダーシップ」「世界基準の視点」「未来に向けた挑戦」などの必要性を提言した。既得権益者にとっては愉快な話ではなかっただろう。だが桑田真澄、古田敦也といった次代の球界を牽引するだろう改革者たちは並木の視点を強く支持し、賛同の言葉を寄せた。また、それを受けた並木は「彼らが改革のために動き出したら、ぼくはそれを全力でサポートする」と決意を示す。いま、実際のビジネスにおいて彼がそうしているように。

並木がビジネスで実際に起こそうとしていることは、大きな視点からみれば「さざ波」ほどのものかもしれない。だが並木は仮に小さな動きだったとしても「トップ10%の優秀な人が気づいて、そのうち何人かが動くだけで大きく変わり始める」と言う。例えば先の植木社長との対談にもあったJALの「挑戦への

サポート」。日本を代表する企業でその動きが成功すれば、ある瞬間に大きな「うねり」になると並木は信じている。

「ベンチャー育成には教育が大事だという意見があります。それは大切だけど、効果が出るまでに何十年も必要です。日本企業も持っている力、そこで働く人が備える高い能力は、すでにイノベーションを起こすに十分な源泉なんです。だから強い意志で組織と人の意識改革に取り組めば、必ず日本は再び強い発信力を示すことができます」

現状に安住せず常に企業が挑戦を続ける。そのために個人の意欲や外部のイノヴェイターを許容し、自らイノベーションを起こす。一方、個人も組織に甘えることなくエンployアビリティ(雇用される能力)を最大化させる。企業と個人が依存ではなく、互いに高め合う挑戦の関係性を築ければ、必然的にベンチャーが活性化しビジネスのダイナミズムが生まれ、と並木は考える。だから企業や人に深くコミットすることにこ

だわり続けるのだ。

2014年春に刊行予定の最新の著作『The Startup Academy - 平成国富論』(仮題)で並木は、小さくまとまろうとする若者に、可能性の芽を摘む社会に、既得権益を守るための慣習に、大胆に切り込み警鐘を鳴らす。

「植木さんが対談で言っているように、何かを守るためにも挑戦が必要。変えたくないから何もしないで時が過ぎるのを待っている。気づいたときにはもう遅い。それは企業にも個人にもあてはまることなんです」と。

そして並木はこう続ける。「実はこの本は、自分自身に向けて書いた部分もあるんです。『おまえはちゃんともがき苦しむ経営のリアリティやインスピレーションをもって、企業や働く人々に向き合っているか』『おまえ自身が挑戦を忘れていないか』って。だからこの本は挑戦する企業や人へのエールだけじゃなくて、『ぼくはぼくの立場で挑戦し続けますよ』っていう決意表明でもあるんですよ」